

JFM だより

vol. **34**
JULY 2020

[鹿児島県十島村]

フェリーとしま2

島の暮らしを支える“生命線”



INDEX

- 01 融資がつむぐまちづくり
- 05 JFM TOPICS
- 11 みんなのギモンにファイナンス博士が回答!
みんな気になる、お金のこと
- 13 わたしのシゴト わたしのジモト
- 14 機構からのお知らせ
- 15 私たちもJFM債買っています!
- 15 編集後記



金融で地方財政を支え 地域の未来を拓く
地方公共団体金融機構
Japan Finance Organization for Municipalities





島の暮らしを支える“生命線”

鹿児島県十島村

フェリーとしま2

東シナ海上の島々からなる鹿児島県十島村。

トカラ列島とも呼ばれるこの地と、本土・奄美大島を結ぶのが、

平成30年4月に就航をした「フェリーとしま2」と名づけられた村営定期船です。

その航路は人々の往来と生活物品の輸送を支え続けており、

まさに十島村にとっての“生命線”となっています。



フェリーとしま2 概要

総トン数:1,953t
 全長:93.47m
 全幅:15.80m
 航海速度:19ノット
 旅客定員:297名
 その他:横ゆれ減少装置
 (フィン・スタビライザ)

フェリーとしま2って？

村民の思いに応えるため誕生した定期船

明治以前の十島村では、島への定期船を望む村民の思いとは裏腹に、数ヶ月に1度の頻度でしか、船が寄港していませんでした。この事態を打開するため、当時の村長たちの働きかけにより、昭和8年に初の村営定期船「としま丸」が就航を開始しました。当時は月4航海という頻度でしたが、船の更新に伴い運航も増え、先代の定期船「フェリーとしま」からは、週2便と月15便の臨時便が運航できるようになりました。さらに、それまでデリッククレーンで吊下げていた自動車を自走で港に下ろせるようになり、輸送台数も飛躍的に増加しました。

誰もが快適に過ごせるフェリーとしま2

フェリーとしま2は、大部屋形式の先代のフェリーとしまと比べて空間が細かく区切られ、乗客のプライベートに配慮しています。また、高齢者等の利用を目的とした多目的室や、車椅子の方でも利用しやすい多目的トイレ、車椅子の動線を意識した広い通路など、バリアフリーに配慮した船内設計になっています。さらに、授乳室や化粧室、キッズルームといった用途別の部屋も設けており、長時間の船旅でも快適に過ごすことができます。

- 1 開放感のあるロビー。無料の給茶器があり、お茶を飲みながらリラックスできます。
- 2 レストラン。写真の座敷席のほかにも、カウンター席やテーブル席もあります。
- 3 高齢の乗客などに配慮し、通路や階段に手すりを設置。
- 4 高級感のある1等客室(2名部屋)。部屋には冷蔵庫、お手洗もあります。
- 5 相部屋となる2等客室もパーソナルスペースを確保。女性専用室も設置してあります。
- 6 多目的室にはベッドも配置しており、仮眠も可能。新型船になって、新しく設置されました。
- 7 体調不良の乗客の対応を行う診察室。
- 8 最新設備を搭載したブリッジ(操舵室)。

フェリーとしま2が十島村にもたらしたこと

平成30年4月の就航より十島村と本土・奄美大島を結ぶフェリーとしま2。

十島村の役場職員であり、定期船の船長を担う中村幸喜さんに、建造の経緯や今後の展望などを伺いました。

十島村の文化、経済、物流に必要不可欠な存在

フェリーとしま2の先代定期船フェリーとしまは18年間運航を続け、村民の生活を支えてきましたが、気象条件などが厳しい外洋を航行する十島村の航路では老朽化の進行も早く、製造中止となっている機器の修理が困難になることも懸念されていました。こうした運航リスクの高まりや、航路利用者のサービス改善、地域振興と一体となった航路運航の活性化を図ることを目的に、平成30年4月にフェリーとしま2が就航しました。以降、この船が十島村と本土・奄美大島を結び、各島の生活物資をはじめすべての輸送を担っています。同航路は村民の生活の基軸となる“生命線”であり、今後も十島村の文化、経済、物流に必要不可欠な存在です。



十島村
フェリーとしま2 船長
中村 幸喜

技術支援も融資活用の大きなメリットに

財政基盤の乏しい十島村にとって、フェリーとしま2の建造費用が課題でしたが、JFMの融資により乗り越えることができました。また、JRTT(独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構)の技術支援を受けられたことも融資活用の大きなメリットに感じています。船に関するさまざまなノウハウや専門知識の不足が不安材料でしたが、建造前のコンセプト検討から、設計・建造時までの確かなアドバイスをいただき、スムーズに建造事業を進めることができました。フェリーとしま2の就航により、先代船に比べて船内環境が快適になったほか、運航速力も安定し、福岡県や関西・関東方面との当日中のアクセスが容易になりました。利用者や輸送量も増加傾向にあり、村でも観光振興などさまざまな施策を打ち出していることから、今後も好調な推移が期待できます。

今後の目標は、原則週2便から、今できる最大の運航回数である週3便に増やすことです。これまで以上に利便性を高め、十島村の村民をはじめ多くの方に愛される船であり続けたいと考えています。

■フェリーとしま2の利用状況

フェリーとしま2の客層は、村民、仕事での利用者、観光客が、それぞれ約1/3程度の割合となっています。インターネットでの乗船予約も行っており、利用状況は3割程度です。また、定期航路のほか、村民の定期検診・健康診断のために年1回検診車両を積んだフェリーとしま2が全島を周る、住民健診特別便を運航しています。



Column

十島村の魅力を余すところなく伝える「7島巡りツアー」

フェリーとしま2は、十島村に欠くことのできない生活航路になっている一方、原則週2便という交通アクセスの少なさから全島を一度に周ることができず、「十島村を一度に見て回りたい」という声が多く寄せられていました。こうした要望に応えるために企画したのが「7島巡りツアー」です。通常便では1島につき約10分程度の停泊時間を1時間半～2時間と大幅に延長することにより、十島村の有人7島をすべて見て回ることが可能です。平成31年度から開始しており、ツアー参加者から非常に好評いただいています。



ご当地紹介

鹿児島県十島村

広大な海に囲まれ、雄大な自然環境下にある十島村。琉球文化と大和文化の接点といわれ、独特の祭事・郷土芸能が受け継がれているところも魅力です。「7つの島の団結と連帯感」を表した村のシンボルマークの通り、人情豊かな人の輪が脈々と息づいています。



十島村のシンボルマーク



鹿児島県十島村

- 人口:671人
- 世帯数:376世帯
- 面積:101.14km²
(令和2年5月31日現在)

私の地元自慢

人と人の結びつきが強い村です!

十島村は、7島の有人島と5島の無人島から構成される南北160kmの孤立小型離島村です。平均気温約20℃と温暖な気候で、島バナナや島らっきょう、天然塩といった本土ではなかなか見られない個性豊かな特産品が自慢です。また、自然が織りなす景観、火山、温泉など秘境を感じさせる環境があり、固有の生物や熱帯性の植物など稀少な動植物を見ることがもできます。伝統的な地域行事・風習が残り、それを継承する中で人の結びつきが強いことも十島村の特徴です。



天然記念物 トカラウマ

明治30年頃に鹿児島県の喜界島から農耕馬として導入され、十島村で飼育されてきた日本在来馬です。通常の馬より小柄ですが、島の環境への適応のためか、暑さに強く頑強な体をしています。昭和28年には鹿児島県の天然記念物に指定されました。



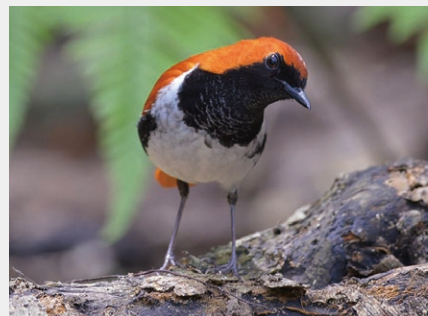
海の恵み 天然塩

十島村の小宝島及び宝島でつくられる天然塩で、海水から汲み上げ、釜焚きしたものを天日干して完成します。一般的な塩に比べ、ミネラル分が豊富で、特にカリウムやカルシウムを多く含んでいるため、シンプルな料理にもよく合います。



バードウォッチングの聖地 平島

十島村平島は「バードウォッチングの聖地」といわれ、毎年、渡り鳥のシーズンになると、十島村の村鳥として指定されているアカヒゲがよく見られます。他にも、アカハラ、シロハラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリといった多彩な種類の野鳥たちを見ることが出来ます。



本件で活用いただいた制度

交通事業

鉄道事業、軌道事業、自動車運送事業及び船舶運航事業の建設改良費等を対象とした事業です。具体的には、地下鉄、路面電車等のインフラ整備及びバス等の車両や船舶の購入等の事業に対して、貸付けを行います。

JFMスタッフ Message



融資部融資課 鹿児島県担当

佐名 慎太郎

交通事業は、バス、都市高速鉄道、モノレール、船舶等地域における交通手段の確保に、重要な役割を果たしています。令和元年度においては、全国の地方公共団体に対し、33件、総額約240億円の貸付けを実施しました。

借入事務にあたり、ご不明な点などありましたら、お気軽に融資部各領域担当までご相談ください。

地方公共団体の皆さまのニーズに的確に対応し、住民に密着した事業を支えるため、より一層の努力を重ねてまいりますので、よろしくお願いいたします。